# 第 1 章　鉄道イベント観察記

本章では、鉄道ファンの生態と行動様式を確認するために、3 つの鉄道イベントの観察記である。これら 3 つの鉄道イベントは、「引退」「公開」「物販」、それぞれの分野を代表するイベントである。このイベント観察は第 2 章・3 章での考察につなげていく部分である。

**1.2010 年 3 月 12 日・さよなら「北陸」、「能登」@上野駅**

2010 年 3 月 12 日午後 10 時 24 分の上野駅 13 番線ホーム。大勢の鉄道ファン、報道関係者でごった返している。本日は JR グループ 2010 年 3 月のダイヤ改正前日。上野駅発金沢行き寝台特急「北陸」が廃止になり、急行「能登」が定期運転を廃止する日である。私は鉄道ファンのこの鉄道イベントに挑む様子の観察と、暴走したりしないかを調査しに来ていた。午後 8 時 30 分過ぎに、「能登」と同型車両で運行される「ホームライナー鴻巣 5 号」に記念乗車した際に 13 番ホームを覗いたが、すでに陣取りで黒山の人集りであった。午後 11 時 03 分に寝台特急「北陸」は上野駅を発車するが、40 分前の時点でホームはこのようになっていた。

**図 3-1-1　2010 年 3 月 12 日午後 10 時 24 分の上野駅 13 番線ホーム**
**背伸びして撮影。黒くつぶれた部分はすべて人間の頭。**

筆者が前掲写真を撮影した横のラインには「毎日新聞社」の腕章をした記者とおぼしき人物がいた。また、鉄道警察隊や駅員さんが警戒に当たっていた。現状ではとても身動きが取れない状態であったので、上野駅中央口などを観察する。

**図 3-1-2　高崎・上越線発車時刻を撮影する鉄道ファン**

中央改札の付近では、「フジテレビ」とかかれたテレビカメラを担いだ記者たちが鉄道ファンにインタビューをしていた。一般の人々も、取材中のテレビクルーや、黒山の人集り、更に何の変哲もない発車時刻を撮影する人々の様子をみて、何が起こったのだろうと怪訝な表情で脇を通り過ぎていく。

ふたたび先ほどの写真撮影位置に戻るも、ひとの頭で何が見えるというものでもない。しかし、その空間は「歴史的瞬間に立ち会う」という気概にあふれていた。

鉄道趣味活動というのは、本来「個人」作業である。すなわち、こうした公空間で同好の士が集結する場は数少ない。そのため、こうした空間はともすれば興奮しがちになる。一方で、「個人」活動という側面からカメラのファインダーをのぞいた鉄道ファンにはもはや周りは見えない。ファインダーの向こうに覗く愛しの車輌がにっこり微笑んでいるのが見えるだけである。そ

の二律背反な状態がせめぎ合っているのが、こうした鉄道ファンのイベント（とくに引退）である。それを実感した私は、「北陸」到着前からこの上野駅（と鉄道ファン）にギブアップを告げて山手線電車に乗り込んだ。

**2.2010 年 5 月 22 日・鉄道ふれあいフェア 2010@大宮**

私が観察した鉄道イベントの 2 つめは JR 東日本大宮総合車両センターで 1993 年から実施されている「JR おおみや鉄道ふれあいフェア」である。ウィキペディアにもわざわざ記事があり、「鉄道ファンからも展示の質が高いと好評を博している」と著述されているぐらい鉄道ファンにはウケのよいイベントのようだ。2010 年は主な展示車両として、EF65 型 500 番台、EF510 型貨物機・特急牽引機、EF80 型などがあった。また、工場内では車輌の移動風景や修理作業などに接することが出来、物販コーナーも充実していた。

鉄道ファンはもちろんのこと、家族連れが数多く参加しており「引退」イベントとは雰囲気は明らかに違っている。ここでは、係員の誘導が行き届いたこともあってあまり殺伐としていた印象は受けなかったが、展示車両撮影における鉄道マニアの姿勢には疑問が見られた。以下の点である。

・三脚、一脚、脚立の必要（場所を取る装備で、露天イベントで必要？）
・カメラボックスの上に立って撮影（人が多く動き回るところでの危険性）
・他者に対して注意を払うことが少ない（子どもが多くいる空間では周囲に目を配らなければ相当危険）

これらの問題点は、上野駅においても散見されたがいくぶん余裕があったため、こうした行為の危険性を十分認識することが出来た。

**図 3-1-3　鉄道ふれあいフェアの様子**

### 3.2010年10月09日・第17回鉄道フェスティバル　2010@日比谷公園

10月14日は「鉄道の日」である。そのことに因んで、毎年10月の第2週末に日比谷公園にて「鉄道フェスティバル」と称し、様々な鉄道会社などが出店を出し、自社路線の周知やグッズを販売している。

本原稿の執筆は非常に逼迫した状況下にあったが、自分の目的と、比較的物販に特化した鉄道ファンイベントの観察を理由に「鉄道フェスティバル」の観察を行った。今回の観察の軸は、参加鉄道会社・鉄道会社が販売しているグッズ・人気鉄道ブース・鉄道ファンの行動・男女比などである。

参加鉄道会社は、JR各社を始めとして関東大手民鉄・関西大手民鉄と北から津軽鉄道・青い森鉄道・十和田観光電鉄・仙台空港鉄道・上毛電鉄・上信電鉄・ひたちなか海浜鉄道・富山地方鉄道・広島電鉄であった。

グッズの主な構成は鉄道会社でラインナップは似通っており、①玩具系（プラレール、Bトレインショーティー、鉄道コレクション）・②カレンダー・③文房具・④グッズ（キーホルダー、缶バッジ、ストラップなど）・⑤ネクタイピン、タオルなど・⑥カード、シール・⑦鉄道部品（路線図含む）などであった。

人気のある鉄道ブースは、おもに①や⑦を販売しているブースであった。特に、〇〇個限定！などという商品には長い列ができ、鉄道ファンは雨の中もくもくと長い列に並んでいた。一部で、鉄道会社ブースのスタッフに絡むファンもいたが目立つほどではなかった。

鉄道ファンは、物品購入の鬼と化し、必死でかけずり回っていた。2人かそれ以上で行動する鉄道ファンも見られ、トランシーバーを抱えて動き回る猛者もいた。目立った混乱はなく、雨模様にもかかわらず異様な熱気に包まれていた。

男女比と言えば、男95：女5ぐらいの比率であり、年齢層も幅広かった。親子連れ、カップルなどの姿も見られた。

全体に、「物産展」のようなイメージで、鉄道会社側が演出する鉄道イベントとはこういうものか、という印象を受けた。日比谷公園でのイベント以外のイベントも同じような感じであった。足を向けたが最後、何か鉄道会社の袋をぶら下げて帰宅することになりそうである。